

『伊勢物語』三段と四段

——人物についての注記的部分——

藤 河 家 利 昭

伊勢物語三段の終には、二条の后についての注記的部分がある。

四段にはそう呼ぶべきものはないが、「本意にはあらで心ざし深かりける人」は、二条の后と思しき人物に対する主人公の関わり方の特性を記したもので、ある程度業平の立場を思い起こしてもよいと思われるので同類として扱うことにした。また二条の后に関する物語には、三段の外に五・六段にも後に注記的部分があり、これらを併せ見なければならぬが、三・四段は五・六段がそうであるように、緊密な照応を見せているので別に考えることにする。注記的部分の記述態度についても、三・四段は主人公の側に立つのに対して、五・六段は相手方に立つという違いがあるように思われる。

三・五・六段の注記的部分については、二条の後の物語として関連付け、それぞれをそこに位置付けるという役割が指摘されている。ここでは、三・四段の中で、その部分が物語の形成上、どのような役割を持つかを考える。併せてこの物語の性格や両段の主題についても考えてみたい。

三段では、従来問題になっている「思ひあらば」の歌の解釈と、注記的部分が後人のものであるとする説の当否、またその役割、四

段では、これも問題になっている「本意にはあらで心ざし深かりける人」の解釈、またその役割、という順で述べていく。

一、「思ひあらば」の歌

三段は、男が、懸想した女の許にひじきを贈るので、歌を詠んで添えたというだけの話である。「懸想しける女」と「ひじき藻」との関係は如何に、という訳である。「懸想」するは、「女を思ひかくる事」(愚見抄)であるが、字音語を用いたのは何か重々しい感じを与える。反面、「ひじき藻」を「といふ物」としたのは、それ之余り都で見かけないものだからというよりも、どこことなく作者の恍けた心持が感じられる。この、言わば謎かけの答が「思ひあらば葎の宿に寝もしなんひしきものには袖をしつゝも」の歌で、「ひしきもの(敷物)」に「ひじき藻」を詠み込むことによって示される。すなわち隠題、または物名の歌である。もしかすると、「懸想」(思ひをかく)の「掛く」と「敷物」の「敷く」とには寝具としての言葉の関連があるかも知れない。それはともかく、ここには秀れた歌

詠みとしての主人公の特色が示されていると見られよう（それは業平を思わせるものがある）。

ところで、ここに「ひじき藻」を出したのは「敷物」と言うためであつたとしても、それ自体余り例のないことである。従来の注釈書では、万葉集に鮎や芹を女に贈るという例があると云っている。そしてひじきは珍重されたとも言う。また、男がひじきのようなものを贈つたのは、懇ろに自分の氣持を伝えようとする所であるから

（惟清抄）とか、女の家の人たちの目に触れないようにするためである（伊勢物語評釈）とか言われている。しかし、これは四段の、男が「あばらなる板敷」に一人臥して女を偲ぶということに照応させるために持ち出されたと考える外はないものである。

次に、秀れた歌詠みであるためには、歌の技巧に巧みであるばかりでなく、その言葉が実質を持たなければならぬ。が、その前にこの歌の意味が明らかでないので検討しておく。従来の説を、「思ひあらば」をどう取るかによって整理してみる（代表的なものだけあげる）。

A 男の「思ひ」とするもの

(1) 思ふ人だにあらば、むぐらのやどのすみかにて、いぶせからんところにも、そでをひしきねたりとも、よもいぶせくはあらじとよめり。

（知頭集）

「思ひ」を男が「思ふ人」とするが、広く考えてこの中に入れた。これは律の宿で共寝することとしている。惟清抄は、恐らくこの知頭集の解釈を指してであろう、万葉集卷第十一、問答（二八二五番）の「玉敷ける家も何せむ八重律おはへる小屋も妹とし居らば」という歌の意味と同じであるとする。知頭集は万葉の歌によって解

釈したと見られる。古意などはこの万葉の歌によって「思ひあらば」の歌が詠まれたと見ているのである。

(2) かばかりたえがたき思ひあらば、ひつしく物には袖をして、むぐらのやどにても、思ひなくてだにあらばありなんと云心也。思ひあらば玉のうてなもかひなし。むぐらのやどもまさるべき心也。

（肖聞抄）

これは思ひの通じない嘆きとし、これでは律の宿でも嘆きのない方がよい、嘆きがあつたのでは玉の台も何にもならない、とする。これも律の宿で共寝することとしているのであろう。惟清抄は、同趣旨の解釈をして、古今和歌六帖第六、むぐら、「何せむに玉の台も八重律はへらむ中に二人こそねめ」の歌の意味と同じであると言う。この歌は先の万葉の歌を作り変えたものか、その類歌と見られる。この解釈は以後の中世の注釈が多く従っている。新釈は、これを受けてであろう、「思ひあらば」を「思ひなくば」と改め、さらに律の宿で一人寝をすることとしている。

知頭集や肖聞抄は、この歌の上句を、恐らく万葉集や古今六帖の歌に拠りかかりながら解こうとしたのであろうが、結果的には無理が生じている。男の「思ひ」とする限りでは正しいと思われるが、そうするとなぜ進んで律の宿を求めるのか考えあぐねたのであろう。ここに端なくもこの上句をそれだけで理解することが無理であることを露呈していると言えるのではなからうか。この歌は言葉が足りないと言われもして来たのである。ただ考える手懸として、肖聞抄が律の宿を「玉の台」と対比して捉えていることが注意される。

(3) 人を深切におもはゞ、たとひ律の茂て荒けがらはしき処なりとも、袖を引敷物としてねんとよめる也。

（愚見抄）

これも共寝と見ているのであろう。中世の注釈の中でもっとも合理的な解釈をしているが、「深切におも」ふとするとところに情況に拠りかかって解こうとしているふしが見られる。「懸想」する、から言うと、たとえ仮定であるとしてもそれほど深く思っているとも見られないからである。

B 女の「思ひ」とするもの

御身^{あまた}にもし私を思ふ心があるならば、極めて佗びしい共寝もしよう。引き敷いて寝る物即ちひしき物には、贈物のひじき藻ではないが、この衣の袖をしつづけ^{注12}ても。(伊勢物語評釈)

現代の多くの注釈がこの解をしている。「思ひあらば」を、自分の思いがあるならばとはしにくい。相手の思いがあるならばとする方が理に適うと考えられたのであろう。しかし、恋の歌として「あなたが思ってくださいなら」とは、男が思っていること自体が疑わしくなって来るであらう。「思ひあらば」は男が「懸想」するということ^{注13}を言い換えているのである。

C 互いの「思ひ」とするもの

君と我相思ふならばいかなる律生ひてわびしげならん宿にも共寝せん、しかん物には袖をしつづ^{古意}もとなり。

現代の注釈もこれに従うものがかなりある。「お互いの愛情があるならば」とするのである。これはB説に近いとも言える。これも同じ難点がある。

以上のように、いずれの場合にも矛盾なく解き得ているとは考えられない。それはこの歌自体、意味が完結していないからである。

二、二条の后についての注記的部分

中世の注釈が万葉や古今六帖の歌に基づいて解こうとしたように、ここでは後の二条の后についての注記的部分、「二条の后のまだ帝にも仕うまつり給はで、たゞ人にておはしましける時のこと也」と合わせて考えなければならぬと思うのである。これについては、作者の注と見るか、後人の注と見るかで説が分かれている。

A 作者の注とするもの

(イ) 物語の作者其人を書あらはしたる詞なり。

(愚見抄)

(ロ) 伊勢がかける詞なるべし。業平の所行をたすけて、たゞ人にての時とかけると云々。(「けさうしける女」を「二条后也」とし、「業平好色の名誉の事なれば、名をあらはしていへるにや」と言う。)

(肖聞抄)

肖聞抄は伊勢物語の作者を歌人の伊勢とするのである。中世の注釈及びそれを受けた近世の注釈の幾つかは、これを作者の注として疑ってはいない。この話を業平と二条の後の物語として読んでゐるのである。この話が事実かどうかは別のこととして、「作物語」(直解^{注13})と考えていた。この注は、女についての物語的「肉付けの部分」(石田樓二氏「新版伊勢物語」にあたる。一方、肖聞抄が「業平の所行をたすけて」と言い、また「業平好色の名誉の事」と言って、男の側から見た場合の役割を考えていることが注意される。ただ、その「所行」とか「好色」とかは、二条の后に懸想して歌を贈ったことを言うのか、歌の意味内容も含むのかはつきりしない。

B 後人の注とするもの(補入、或は竄入による)

(イ) 又名を出さざる人を時世官位をさへいとことに書かへて必其人にあらぬさまに書たるをかく定々^{さださだ}と^{さだ}の御名を出せる事此文の旨に大にそむけり。

(古意)

(向)本文とは文のさまいたく異なり。

(新釈)

(い)高子と業平の話として具体的な人間の生の関係の^{なま}かもし出す事件に対する興味を加えることになってしまった。

(講談社学術文庫)

江戸時代の注釈以来現代の注釈に後人の注とするものが多い。新釈は六段の所で、二条の後の実名を出すことは、事の性格上関係者に對して憚りがある筈だと言っている。また、二条の後は后位を停められた期間があるので、本位に復した天慶六年以後でないかそう呼べないということも理由に挙がっている(勢語諸註參解^{注15})。また、注記的部分以前との形式、内容上の齟齬が問題になって来る。

しかし、この部分は塗籠本でも省いてはいない(ただし「五条后」とする)。実名を出すことへの憚りはこの注の表現自体にもある。

その一方で、初段と二段を受けて、二条の後の物語は伊勢物語の実質的な始まりを告げるのであり、ここで二条の後の名によって時代を設定しておく必要もあった。これは東下りの物語に及ぶと見られる。これを文徳天皇の時代とする考えがあるが適當であろうか。物語の出来事は、貞観八年(八六六)十二月、高子が女御になる以前と考えられる(愚見抄)。惟清抄以下は、貞観元年(八五九)十一月、五節の舞姫に上がった時より前と見ているようであるが、むしろその時から業平との交渉が生じたと思えるべきであろう。清和天皇の即位はその前年である。九歳の幼帝である。高子が舞姫になった時、從五位下に叙せられた(三代実録)のも「たゞ人」と言うにふさわしい。ただ將來入内する含みがあったと見るべきであろう。注記的部分はそのような空気を伝えているように思われる。

さて、この部分と歌とがどのように関わるであろうか。ここで同

じ話を伝える大和物語百六十一段の前半部と比べてみる。

在中将、二条の後の宮まだ帝にもつかまつり給はで、たゞ人におはしましける世に、よはひたてまつりける時、ひじきといふものをこせて、かくなむ、

おもひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじき物には袖をしつゝも

となむのたまへりける。かへしを、人なむわすれにける。

(日本古典文学大系)

これは、普通には大和物語が伊勢物語に拠ってこの話を作ったと言われている。ところがこの歌を詠んだのは二条の後の宮になっている。敬語の使い方もあるが、伊勢物語三段の注記的部分をそのまま取り込み、後半部と共に二条の後の宮の側に立った叙述となっているのである。この点も男の側に立つ伊勢物語と違う。ここでは在中将と二条の後の宮という人間関係への興味だけではなく、その現在の身分の隔たりを念頭において読むと、後の宮自ら「私を思ってくださるなら律の宿で共寝もしましよう、敷き物としてはお互いの袖をしながらでも」と言ったことによつて、身分の隔たりを越えた男と女との心の結び付きが示される。大和物語は現実の人間関係を越えたところに生まれる純粹な心の結び付きをテーマにしていると思われるのである。「律の宿」は、先に引いた万葉集の問答の歌(その間の方は「思ふ人來むと知りせば八重律おほへる庭に珠敷かましを」である)などから、普通には女の家を指すと見られるが、ここでは「まだ帝にもつかまつり給はで」(將來宮中に住むことになるという意味もある)から考えて、それと対照的な在中将の家と見るべきであろう。この場合、高貴な人が卑しい者の家に住むという

ことに意味があるからである。後半部において、後の宮が「たてまつれる御単衣の御衣」を被け、在中将の歌によって「昔おぼし出でておかしとおほしけり」(圈点筆者)というのも、後の宮が律の宿で寝ることも厭わないと言つてこそ生きて来る。言うまでもなく歌の中心は上句にある。

伊勢物語でも「律の宿」は注記的部分の「帝」(御門)と関わる。

先の万葉や古今六帖の歌では律の宿が「玉敷ける家」や「玉の台」と対比されていて、それらは帝の御殿ということにも結び付くからである。この注記的部分は女の素姓を明かしただけでも、また「業平の所行をたすけて」言つただけでもない。近い将来入内して帝と宮中に住む二条の后に対して(男もそれを知っていたと見るべきであらう)、「もし私のあなたへの思いがあるとするとするなら律の宿で共寝も辞さないほどのものです」と言つたことになる。仮定の形で言つたのは、入内する時のことが想定されているからである。また次の四段において女の入内が現実のものになることと関わっているからである。ここでは「律の宿」は女の家を指す。四段でも舞台は女の住む所である。これは滑稽味を交えていると見られる。しかし、注記的部分が置かれることによって、男の言つたことがにわかに現実的な意味を持つことになる。この注記的部分は直接には歌の上句に關わりと見るべきである。その上で隱題を詠み込んだ下句が、単に技巧としてだけでなく、言葉に真実味を持つことになる。そこに、懸想した女に対して、ということはまだ深い物思いには至っていないのであるが、一挙に親密な關係を求める主人公の情熱的な姿が捉えられることになる。ここでは歌の中心は下句にある。上句は物語の情況を捉え、下句はそれを踏まえて主人公の特色を示すのである。

このように両者が違う役割を持つのは、この歌が、表現と意味内容の上で上句と下句と並立する傾向にあることと関わっている。さて、この注記的部分をそういう体裁にし、物語の本文とは一応別にして後においてはなぜかということになる。ただし「懸想」するという言葉は相手が二条の後であることにふさわしい。それは事の性質上ということがあると思われるが、この部分が女のことを言っているようでありながら、もっぱら男の歌に関わり、男の姿を捉えるために必要だからである。なおこの歌をもとは女の歌であらうとする考えがあるが、それにしては表現が直接に過ぎる。大和物語では女の歌とするが、「律の宿」を男の家とせざるを得ない。一方で「律の宿」を入内することと対比するなど、大和物語は伊勢物語の注記的部分の意圖を充分に把えていると見られる。この歌は伊勢物語の男の歌としてこそふさわしいものである。

三、「本意にはあらで 心ざし深かりける人」

四段は、東の五条に大后の宮がいらっしゃった、その邸の西の対に住む人を、男が訪ねて行つていたが、一月の十日頃の時分によそに姿を隠した、それで翌年の一月にその人の居た所に行つて去年を思い出して歌を詠むという話である。この大后の宮を五条の後順子(仁明天皇后、文德天皇御母)とするのが通説となっている。しかし、これは愚見抄を始めとする中世の注釈が説くように、染殿の後明子(文德天皇皇后、清和天皇御母)とするのがよいのではあるまいか。その方が皇太后、即ち「天子の御母」(愚見抄)であることが

生きる。前段で清和天皇が暗示されているからである。染殿の后は、貞観六年（八六四）正月に、皇太后であった順子が太后太后になったのに伴って皇太后になっている（三代実録）。同八年十二月に、高子は女御として入内する。臆断は、貞観元年十一月に高子が五節の舞姫となったことを、三段に言う帝にお仕えすること（入内）と考えたために、順子をあてたのである。大鏡（文徳天皇の条）などによれば、五条の后とは順子を言うようであるが、六十五段の末尾には染殿の后をそう呼んだと解し得る記述もある。五・六段の基経や国経との関係の近さからして、いとは同時代と同時に、基経とは同じ良房の子ということになる明子の方がふさわしい。また、二条の後関係章段の最終段である六段において染殿の后の名を明かしたと考えられる。これは二条の后を男から取り返す話である故に名を明かしたとも言えよう。四段では男が訪ねて行ったり、五段では忍んで通った挙句、主が許したりするので名を明示する訳にはいかない。大后の宮が明子であるとすれば高子とはいとこの間柄であるが、将来は高子のしゅうとめにもあたることになる。前段の注記的部分を承けて、高子は近い将来に入内すべく明子の許に身を寄せていたと思われる。

そういう事情のある人に対して、「本意にはあらで心ざし深かりける人」が訪ねて行くことになる。ここでは女の素姓や立場を語るよりも、それに男がどういう態度で関わったかを語る方が主なのである。三段と四段とは同じ二条の後の入内以前と入内前後という関連があり、しかも、「律の宿」で共寝する事を願うのに対して、「あばらなる板敷」に一人臥すという緊密な照応がある。この部分についても、「懸想」することに対してそれが「本意」のままに行かな

いと承け（同じ字音語である）、「心ざし深かりける人」も、「思ひあらば」の歌の意味を承けるのであろう。また三段の注記的部分が女の素姓や立場を客観的に説明するのに対して、この部分は男の有りようを内面から説明している。この二つの部分は表現形式の上でも「…でなくては…である」類似する。三段の注記的部分が歌に深く関わるようにこの部分も歌の意味を強く規定すると考えられる。この部分については次のような解釈がある。特に「本意にはあらで」の取り方に注目し、代表的なものだけ挙げる。

A あらはれたるにはあらで、こゝろざしふかき人のといへるなり（書陵部本によれば「顕意」とする） 知頭集

B あらはにはあらで也。又本意にはあらで也（惟清抄によれば「はに出る」からの類推によるらしい） 肖聞抄以下中世の注釈 古意は真名本によって「穂にはあらで」

C 思のほかなることろ也。かねてはこれほどまではおもはざりしが、深切になりたるを云々 愚見抄

D (4) はじめより此の女をと思ひ入れたるにはあらで、なにとなきことのついでにゆきかよひそめ、さてねんごろにたづねとひなとするより、かたらひつきて、こゝろざしのふかくなれるを云々（塗籠本「ほいにはあらでゆきとぶらふ人、こゝろざしふかかりけるを」による） 新釈

(4) 当初からの宿願というわけではなくて愛情が深くなってしまう男が 鑑賞日本古典文学 現代の注釈に多い

E (4) 身分のちがうところから本意に思いながら、思う心の深かった男が、通って行つて関係していたのに（「行きとぶらひ」にかける） 伊勢物語評釈

(四) 本心からというふうではなかったが、じつは深く思い慕っていた男が 日本古典文学全集

F(イ)表立って思うように通うことはできなかったが、思いの深かった男が、しきりに通っていたが「行きとぶらひけるを」にかけると見られる。伊勢物語全釈 日本古典全書は塗籠本による(四)心にかなふほどならぬを云々 臆断 女との仲が思うように行かず 日本古典文学大系

「本意にはあらで」の意味の違いを見たが、諸汪とも女と大后の宮との縁故関係や将来の身分などを考えて解いている点では一致する。その続け方によって意味の取り方が違って来るのであろう。従って、「心ざし深かりける人」にそのまま続けたものと、「行きとぶらひけるを」に続けたものとに分けることも出来る。前者(D(イ)・E(イ)・F(イ))のみならず後者(A・B・C・D(四)・E(四))においても文章の通じ易さをはかっている点では同じである。ここはやはり前段の「懸想」するとの関係もあり、F(四)のように「思い通りにならないで」とすべきである(ただし続き方は明示されていない)。これは相手が大后の宮の邸に住み、しかも入内が予定されているような人なので、本からの願いのようには行かないでと、今の、相手との仲を主人公の側に立って述べようとするのである。それを「心ざし深かりける人」に続けると、それでいて女への愛情が深く、深い愛情をもって関わって行かざるを得ない人ということになる。「思い通りにならないで愛情が深かった人」とは、矛盾しかねない言い方であるが、むしろそこにこそ主人公の特性が示されていると見るべきである。諸汪が考えている相手の身分や立場への憚りは「本意にはあらで」に示されているのではなく、「行きとぶらひけ

るを」(行って相手の様子を尋ねる)に示されていると言えよう。古今集では「もの言ひわたりけるを」と直接的である。なおこの「心ざし深かりける人」は古今集にないが、それについて「この一語が添うと、「人」という人間が、皇室対臣下という、理性としては超え難い隔りも、恋情のわりなきに盲目になり、止むに止まれぬ状態に陥ることの可能を暗示するものとなつて来る」(伊勢物語評釈三八頁)と言われている。しかし、相手がそういう事情にあれば事態は困難を増すだけである。それがどう変わっても変わらぬ愛情を持ち続ける人と規定したことになると思われる。それが古今集と、歌の意味をも異ならせるのである。このような主人公の特性は女が宮中に入っても変わることはない(「人の行き通ふべき所にも云々」の「人」は三段の「ただ人」と照応するようである)。「猶、憂しと思ひつつなむありける」は、「本意にはあらで」を承けるが、つらいと思いつつ日を過ごすのは、一面から言えば愛情が深ければこそである。古今集では、「えものも言はで」が、「本意にはあらで」の言ひわたりけるを」を承けると見られる。

このような主人公は、翌年の同じ時節に去年を恋しく思つて行ったにもかかわらず、あたりの情景が去年と似ても似つかないのを見た時「去年に似るべくもあらず」も古今集にない部分である。その特性をいかに發揮するであろうか。歌の下句「わが身一つはもとの身にして」には、その特性を前提として、相手が遠く去った今もかつてのままに深い愛情を持っている主人公の姿が示されているのであろう。歌には「わが身一つ」「もとの身」という同じような意味の言葉の繰り返しがある。先の主人公の特性を述べた部分にも「本意」と「心ざし」という類語を重ねている。「本意にはあらで」

とは裏を返せば「本意」のままにしたいという気持があることになろう。ここに歌をもとにして主人公の特性を規定した証左があるとも言えよう。そのような主人公の目からすると月や春（この場合は梅である）はどのように見えたか。先ず梅である。「梅の花ざかり」は「世間の梅」（肖聞抄）で、それが「思の催し」（同）となるのであるが、「去年を恋ひて行きて」からすると西の対にも梅はあったと思われる。そして、「立ちて見、あて見、見れど云々」は梅の花に女の姿をどうにかして見出そうとしたが、遂に見出し得なかったと言うのであろう（塗本^{まづ}「こぞをおもひて、かのにしのためいきてみれど」には従えない）。次に月である。藤岡忠美氏は、「十日ばかり」の月を「美しくまるみを帯びてきたくせに早々と姿を隠してしまう愛憎にたえぬもの」とし、「月やあらぬ」と初句にうたい出した作者の創意の基盤には、姿を隠してしまつた女と『十日ばかりの月』との二重写しになつた映像があつたのではなかつたか云々」と言われている（鑑賞日本の古典四三〇四頁）。西の空に沈む月を見るには「西の対」がよい。女がいなくなったことを「隠れにけり」と言い、宮中を「人の行き通ふべき所にもあらざりければ」とし、知頭集が言うように宮中を「雲の上」（或は雲居）と呼ぶことから月と関連付けているのも、月を女になぞらえているからであらう。「あばらなる板敷に、月の傾くまで、臥せりて」も一夜の時間の経過だけでなく、何も敷いてなく荒れた感じの板敷に一人臥す男を、西に沈み行く月と対置しているのである。歌の「や」を疑問と取るか反語と取るかで説が分かれている。変わらぬ自分に対して月も春も去年と違うという限りでは疑問説に立つべきであらう。しかし、「我心のおもひなしにかはらぬ物もかはりておぼゆる事也」（愚見

抄）というのではない。現に月や梅の花に女の姿を見出そうとして見出しかねている主人公の姿が示されているのである。歌の中心は上句にある。これは上句と下句を対立的に捉えることによって、上句の特異な表現（月や春を擬人化し、変わらぬはずのそれらに変わったのかと疑いを投げかける）を生かすことにねらいがあつたと見られる。

古今集の同じ歌の場合、梅の花も月も昔のままに あつたと思われる。ここでは「月のおもしろかりける夜」とあり、梅の花より月が中心でやはり月に女をなぞらえていると見られるが、月そのものが変わりようもなかつたことは、「月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりて」と、その変わらぬことを確かめ、作者が一人取り残されたとしていることでそう言える。従つてこの歌の意味は次のようになる。月や春は昔のままではないのだから（昔と変わるうはずもない）、我が身だけは昔のままにここにあるのだが（自分の境遇は昔と変わつてしまつた）。周りの月や春から結局我が身に戻つて、自分に深い悲しみがあることを否定出来ないというのである。これは已に女がいらないものとして、そのために、自分というものが変わらうはずもないのに変わらざるを得なかつたのである。歌の中心が下句にあることは言うまでもない。これは在中将集や業平集にあつても同様である。このことから考えると、歌の詠まれた事情は古今集のようではなかつたとしても（或は伊勢物語に拠つたとしても）、歌の意味は古今集の受け取り方が順当である。この歌は單純に自然と人事を対照させたのではなく、自分というものの捉え方にも一つ屈折があるのである。しかし、伊勢物語のように上句と下句を対立的に捉えさせる構成をこの歌が取つていたのである。

こうして三段と四段は、一方が、懸想するという段階で、将来入内する筈の女に対してお互いの袖を敷物としてでも律の宿で共寝しようという熱情を語り、他方が、入内して手の届かなくなった相手に対して昔と変わらぬ深い愛情を持つという純粋を語って、両段併せて困難に対して、むしろ困難であるゆえに身をもってそれに関わっていかうとする主人公の姿が描き出されている。

懸想した女にひじきを贈るという謎を歌で解き明かし、「思い通りにならないでそれでいて愛情の深かった人」が、手の届かぬ存在になった女に対して、その特性を歌で発揮することに両段のテーマがある。いわば難題に対して歌でどう答えるかという物語であり、それは歌詠みとしての主人公（歌人業平とほぼ重なると思つてよい）の特色を語ろうとすることでもあった。その特色は、隠題を詠み込んだり、自然を擬人的に表現している和歌特有の表現を持つ部分を生かすことによつて示された。即ち、それらを単に言葉の綾としてだけでなく、実質を持つものとした。このためにその前提となる、本来歌の中心として心情を述べる部分に、史実に基づくという体裁の二条の後のことやそれに対する業平と思われる主人公の特性を関わらせた。従つて、この注記的部分は物語の基本的な条件設定であると考えられる。その二条の後に業平の話は已に伝わっているものを取つたとも考えられるが、「月やあらぬ」の歌の場合、月や春に我が身を対置し、変わらぬものになつたのかと疑う業平独特の表現の中にその話を取り込む素地があり、或はこの歌自体からその話を作り出されたかとも考えられるのである。いずれにしても、自然の擬人的表現を一步進めて、そこに具体的な人事を見る時に、

日常的次元を越えた物語の世界が開けたのである。

〔注〕

- 1 福井貞助「伊勢物語生成考」（国語と国文学昭和二十四年三月号）、後に「伊勢物語生成論」（有精堂、昭和四十年刊）所収。
- 河地修「伊勢物語・二条后物語の生成」（文学論叢第五十二号、昭和五十二年十二月）など。
- 2 日本古典文学大系による。引用する場合も同書による。以下同じ。なお表記は私に改めた所がある。
- 3 続群書類従による。以下同じ。
- 4 続群書類従による。引用する場合も同書による。以下同じ。
- 5 続群書類従による。以下同じ。
- 6 日本古典文学大系による。ただし、惟清抄は、四・五句「しげれる宿にいとすまば」とする。
- 7 考證伊勢物語詳解の引く所による。引用する場合も同書による。以下同じ。
- 8 嬰兒抄は、万葉の歌を「本歌」とする。福田良輔「伊勢物語の民謡性―万葉集・古今集・神楽歌・催馬楽を中心として―」（国語国文昭和十一年一月号）は、この歌を「万葉集歌の類歌または系統歌」と見ている。
- 9 続群書類従による。以下同じ。
- 10 続国歌大観による。ただし、惟清抄は、この歌を「万葉」とし、四・五句を「はへらむ宿に独こそねめ」とする。
- 11 国文学註釈叢書による。以下引用する場合も同書による。
- 12 この解を取りながら、共寝ではなく独寝とするものがある

(精講など)。

13 宋刊国文古註釈大系による。

14 注13に同じ。

15 注1の河地論文。

16 角田文衛著「王朝の映像」(東京堂、昭和四十五年刊)。由良

琢郎著「伊勢物語人物考」藤原高子と惟喬親王」(明治書院、昭和五十四年刊)もこれに近い。今井源衛「大和物語評釈・五十」(国文学第十卷第一号、昭和四十一年十月)では、高子の入内以前の関係を、五節舞姫に出る一・二年前から出た後一・二年の間(高子十六・七から二十歳ごろまで)と見ているが、この考えでもほぼ清和天皇の時代と言える。

17 諸注は、多く在中将の歌とする。二条の后が詠んだとしうることにについては、吉山裕樹「大和物語における在中将・二条后説話と伊勢物語」(広島大学文学部紀要第39巻、昭和五十四年十二月)に指摘がある。

18 その他、万葉集卷第十九、四二七〇(橘諸兄)「葎はふ賤しき屋戸も大君の坐さむと知らば玉敷かましを」(古今六帖第六、むぐら、左大臣諸兄、四句「こむと知せば」、古今六帖第六、むぐら、「葎生ひて荒たる宿の恋しきに玉と作れる宿も忘れぬ」など。

19 折口信夫「伊勢物語・ノート篇」、伊勢物語全釈。吉山裕樹「葎の宿―『伊勢物語』三段の歌をめぐる―」(国文学攷第八十七号、昭和五十五年九月)も、二条の后が詠んだとする方が落ち着きがよいとする。

20 契沖全集による。

21 知頭集もそう考えているようである。

22 片桐洋一著「伊勢物語の研究(資料篇)」(明治書院、昭和四十四年刊)による。

23 その理由については、「親はらから、ゆるして通ふこそ本意なれ、それにはあらでの心也」(拾穂抄)などとされている。

24 古今和歌集卷第十五、恋歌五、七四七番。引用は日本古典文学大系による。

25 日本古典全書による。